



南高SSHだより

第3号
H28.10.18
新潟南高等学校
SSH部発行

平成28年度 トキ野生復帰プロジェクト研修

- 1 目的・概要 「新潟県トキ野生復帰推進計画」に参画し、新潟大学と協同で、新潟県の鳥であるトキの野生復帰に向けての調査や研究を行い、身近な環境問題への意識を高める。新潟大学農学部講師の指導のもと、科学データに基づいた環境保全について学ぶ。この事業は平成20年から始まり、今年で9年目、9回目である。
- 2 期 日 平成28年8月5日(金)～8月7日(日) 2泊3日
- 3 場 所 佐渡市新穂キセン城・トキ野生復帰コアエリア、トキ交流会館ほか
- 4 宿泊所 トキ交流会館(佐渡市新穂湯上、「新潟大学朱鷺・自然再生学研究センター」がある。)
- 5 講 師 新潟大学農学部 准教授 本間 航介 先生
- 6 参加者 新潟南高校生徒11名(1年生男子8名、女子3名)、引率教員2名。
- 7 内 容

(1) 1日目: 8月5日(金)

① 研修Ⅰ(13:30～15:20): トキに関する本間先生の講義

- ・現在、トキは約250羽が放鳥され、約200羽が野生にいます。野生での死亡率などを考えると、まだ、放鳥を止めると絶滅する状態である。
- ・トキをめぐる4つの誤解

① トキは環境が悪くなったから絶滅したのか?

→明治に入り外貨獲得のために乱獲された(100万羽以上から100羽へ)。更に第二次大戦後、人々の生活様式が変わり、生息していた里山が荒廃した。

② トキ(学名 *Nipponia nippon*)は日本固有種で、中国とは別のものか?

→トキは東アジアに広く分布し、移動する。中国と日本のトキの遺伝子は同じ。

③ トキのエサはドジョウか?

→ドジョウも食べるが、両生類、昆虫など、水生動物全般を食べる。

④ トキの野生復帰は国策で、万全の対策ができていますか?

→地元の人々や研究者の熱意、努力、奉仕で支えられている。地元の負担も大きい。

- ・トキは里山の鳥。里山のように、さまざまな環境が混じっている「環境モザイク」が大切。トキを守るためには、食物連鎖のピラミッドを守らなくてはならない。
- ・トキは繁殖期に自分を塗装する珍鳥。足が短いため、水を避ける。悩むとくるくる回る。メスの方がオスよりも活動的。

② 研修Ⅱ(15:30～17:20): トキの観察、生物相調査(新穂長畝。平野部のビオトープ)



図2 研修Ⅱ: 生物相調査

- ・新穂長畝にある水田にお邪魔した。トキのためにビオトープとして整備されている。私たちが行くと、すぐにトキが飛び立つのが見えた。私たちが泊まったトキ交流会館の前も、トキたちのねぐらになっていて、トキを観察することができた。2年くらい前、トキを見るために早起きしたことを考えると、野生復帰が進んだことを実感した。
- ・そのビオトープで生物を採集した。30秒間、水に網を入れ、すくったものをバケツに入れる。それを3人でくり返す。採集した生物を研修室に持って帰った。



図1 研修Ⅰ: 本間先生の講義



図 3 研修Ⅲ：生物の同定



図 4 研修Ⅳ：トキの観察



図 5 研修Ⅴ：ビオトープの整備作業



図 6 研修Ⅷ：トキの森公園見学

③ 研修Ⅲ(19:30~22:00)：採集した生物の同定

- ・生物の同定作業(名前調べ)は大変。夜遅くまで図鑑と付き合わせて調べた。長畝の特徴は、在来のメダカが多いこと、外来のウシガエルのオタマジャクシやアメリカザリガニがいること。大学生が研究しているツルグレン装置も見学した。

(2) 2日目：8月6日(土)

① 研修Ⅳ(8:30~9:55)：トキの観察(新穂長畝)

- ・昨日の長畝とその近くで、野生のトキを望遠鏡で観察した。合計4羽のトキを比較的近くで観察できた。

② 研修Ⅴ(10:50~15:00)：森林観察、環境整備、生物相調査(新穂キセン城、山間のビオトープ)

- ・車で30分以上、山道を行き、山間のビオトープであるキセン城に着く。放棄されて荒れた棚田や森林が広がるが、昔は主要街道だった。
- ・棚田は放棄されて約40年たつと、密度の高い林になる。枝を広げられないため、光合成量より呼吸量が多く、このままだと木は枯れてしまう。里山として使ってきた森林は、使い続けなくてはいけない。
- ・放棄田のカンガレイとガマを抜いた。ガマの地下茎を一番長く掘った人にはギョウザをプレゼント、ということでみんな張り切って、文字通り泥だらけになってガマ抜きをした。地下茎の最長は、過去の約5mの記録を大幅に上回る、10m80cm以上だった。(山から下りた後、服はコインランドリーへ、人は温泉へ行った。)
- ・その後、昨日と同じ手法で生物の採集を行った。

③ 研修Ⅵ(19:45~23:00)：採集した生物の同定

- ・ゲンゴロウ類とヤゴ類の同定が最大の難問だった。植物で苦労している班もあった。キセン城の特徴は、外来種がないこと。また、放置された棚田では生物が多くいたが、草刈りや耕した後の棚田では生物は少なかった。人の管理によって生物は減ることがわかった。

(3) 3日目：8月7日(日)

① 研修Ⅶ(8:00~9:40)：トキの観察(国仲平野)

- ・コンビニで朝食を買い、食べながら、水田を車で走り回り、トキを探した。残念ながら、トキを見ることはできなかった。しかし、何のことはない、トキ交流会館に戻ると、その前の木の上にトキがいた。

② 研修Ⅷ(10:35~11:30)：トキの森公園見学

- ・本間先生の解説を聞きながら、トキの森公園を見学した。

8 生徒のアンケートより

- ・森や生き物がこのままでいることができるのは、地元の方や研究者たちの努力のたまものであり、そこまでにするのに相当な時間がかかること、また、私たちにできるのは、このような研修に参加し、どんどん知識を増やし、改善策を考えて行くことだと思った。
- ・トキの暮らしやすい環境は、里山のようないろいろな環境が混ざって存在している場所であると分かった。そのような場所はトキだけでなく、トキのえさとされる昆虫や魚なども住みやすい場所であり、生態系のバランスも保たれることがわかった。
- ・現在のトキの生息地に関しても、中国の一部の地域にしかないということを知り、トキは日本だけの問題じゃないと分かり、トキの復帰プロジェクトは日本だけでなく東アジアでとても重要な課題ということが分かりました。